

わが国における重種馬の生産と利用に関する社会・経済的研究

(論文要旨)

一般的に「馬」といえば、多くの日本人は競馬場で大観衆の前を颯爽と駆け抜け、人間達に多くの感動とドラマを与える、「サラブレッド」を思い起こすであろう。しかし、日本には「重種馬」という全く別な馬もいる。

重種馬は文字通り体格の大きな馬である。サラブレッドの倍ほどの大きさを誇り、サラブレッドの象徴がスピードならば、重種馬の象徴はパワーである。れっきとした馬なのであるが、世間一般の重種馬に対する知名度はあまりにも低い。

元来、重種馬は、人間にとって無くてはならない家畜であった。一般的には農耕用、運搬用として使用され、戦争が激化すると軍馬用としても扱われた。また、重種馬は草競馬用の競走馬として農民達の「生きがい」つまり、農村生活の充実という文化的側面も持っていた。

上記のように、重種馬は人間達に産業的にも、文化的にも多大なる貢献をし、恩恵を与えてきたのである。しかし、いつからか、重種馬は「近代化のはずれもの」と呼ばれるようになり、現在では、農民達の草競馬から発展し、北海道の地方都市(旭川、岩見沢、帯広、北見)で開催される「ばんえい競馬」によって、人間達から喝采を浴びるか、「馬肉」となり、人間達の食欲を満たすかの2つの需要しか無くなってしまったのである。

前述した通り、現在、重種馬に対する世間的知名度は低い。重種馬に関する文献、資料なども限られており、仮に存在したとしても、人工授精などの「育種学」のものが主である。歴史、生産形態、需要構造、利用形態などの面から重種馬を考察した文献は、殆ど見かけた事が無い。

本論は、このような一般的にあまり解明されていない重種馬の歴史、生産形態、需要構造、利用形態を、現存する資料と重種馬を生産、利用している現場の人間達に対する聞き取り調査などを主に明らかにし、今後の重種馬のあり方について考察を行ったものである。

第1章では、重種馬の歴史について述べている。元来、日本には「和種(在来種)」と呼ばれる小柄な馬しか存在しなかったが、「北海道開拓」、「軍馬」という2つの理由で、重種馬は日本に登場した。

重種馬は、農耕用にプラウを牽き、たい肥を生産し、運搬用に荷物を運ぶなど、北海道の産業に欠かせない存在であった。また、文化的側面として、「草競馬」が開拓民の欠かすことのできない娯楽として浸透し、戦後、ひとつの競馬産業として、ばんえい競馬が独立する基礎を形成した。

戦争の激化に伴い、軍馬需要も次第に増えていった。確かに、重種馬自体も砲兵輓馬として活躍した部分もあるが、軍が必要としていた馬は、駄載用の中間種馬であった。重種馬は大きすぎて扱いにくい面もあり、あくまでも馬格改良の面で軍馬に貢献したものであ

った。

第 2 次大戦が終結し、軍馬需要が無くなると重種馬は再び、農耕用、運搬用として飼養される事になるが、高度成長期におけるモータリゼーションの普及とともに、重種馬需要は急激に衰退の道を辿る事になる。耕耘その他の作業はトラクターに代わり、運搬はトラックに代替された。たい肥は化学肥料に代替されてしまった。いつしか、重種馬は「近代化のはずれもの」として「ばんえい競馬」と「馬肉」という 2 つの需要のために飼養される事になったのである。

第 2 章では、重種馬の生産形態について検証している。重種馬には、ペルシュロン、ブルトン、ベルジャンなどの品種があり、現在の重種馬はその 3 種類の掛け合わせによる半血種が殆どである。

重種馬の生産、飼養はその多くが北海道で行われているが、生産頭数、飼養頭数ともに、農家戸数の減少、重種馬生産が農家の副業として行われている影響などにより、近年、減少の一途である。

重種馬生産地として古くから名高く、現在でも国内有数の重種馬生産地域である、十勝地方における重種馬生産形態の現状の調査結果は以下の通りであった。

重種馬生産はあくまでも畑作・酪農農家の副業で行われており、重種馬生産が基幹作目にはならず、重種馬による利益だけで農業経営は成立しないものであった。

その原因は、様々であるが、受胎率の低さによる生産効率の悪さと販売の不安定性という 2 つの不確定な要素の存在が大きい。

重種馬は人工授精も殆ど行われておらず、その生産率は約 60%にとどまっている。一般農家の繁殖牝馬飼養頭数は 3~5 頭である。つまり、年によっては子馬が生まれない年もあり、子馬販売による収入が全くない年もあるなど、かなりのリスクを背負った生産を行っているのである。

それに加え、販売時期も販売価格も安定しておらず、ケースバイケースなのである。子馬が繁殖牝馬の腹の中にいる時点で、既に買い手が決まっている場合もあれば、最後まで、子馬の買い手が見つからない場合もある。また、競走用か肉用かで価格にも大きな差が出てくる。

これほどのリスクがあるにも関わらず、重種馬生産による利益は非常に小さいものであり、基幹作目として成立することは難しいのである。しかし、生産者達は自分の生産馬が、あわよくば競走馬として活躍することを願い、副業として、多分に趣味的に、その生産を続けているのが現状であった。

第 3 章では、重種馬の需要構造について考察している。重種馬需要は大きく分けて、ばんえい競馬用の競走馬需要と馬肉用の肉用馬需要の 2 つである。それ以外の需要はその 2 つの需要から派生したものである。

最終需要の約 9 割は、馬肉需要であるにも関わらず、生産者の意識は競走馬生産にあるため、あくまで、「結果として、肉用に転化されている」といえる。言い換えれば、「競走

馬」という大きなふるいが存在し、常にそのふるいにかけて続けられ、そこから落ちた馬は逐次、食肉用に回されているのである。

この事が可能な要因は、競走用と食肉用、双方共に求められる馬の資質が「体格の大きい馬」と共通していることにある。前者はそれによる「牽引力」を、後者はそれによる「産肉性」を求めている。この共通点を活用し、現在の重種馬需給は微妙なバランスで成立し、循環している。

とはいえ、重種馬需要は競走用、食肉用共に局地的なものであり、規模は非常に小さい。中でも、重種馬需要の大半を占める食肉需要に関しては、重種馬生産地と消費地の分離、閉鎖的な流通構造、限られた消費形態、加工用肉が主であった輸入肉の生食市場への参入、生体馬の輸入増加などの様々な要因により、需要構造の複雑さ、不透明さはさらに進行しているといえる。

第4章では、重種馬の利用形態について考察している。現在、重種馬の利用形態は競馬産業である「ばんえい競馬」と食肉産業である「馬肉」がある。

ばんえい競馬は現在、1つの岐路に立たされている。ばんえい競馬は、北海道が創りあげた独創的なひとつの産業であり、馬事文化であるが、近年、他の地方競馬同様、累積赤字に苦しみ、地方財政を圧迫している面もあり、決して順調な産業とはいえない。最後の望みである全国展開にその全てを託すしかない状況となっている。

馬肉は「近年グルメブーム、食の多様性により消費拡大」ということを常に言われ続けているが、実際にその消費が伸びているのは、古くより、馬肉を食している地域である。おそらく、この事は今後も変わることなく、あくまでも嗜好品として、一部の人間に食されていくことになるだろう。

これらの事により、今後の重種馬のあり方についての結論は以下の通りである。

重種馬の生産・利用に関する現状は、「特徴＝問題点」と言ってもよい。しかし、重種馬の最大の問題点は、「肉用馬」という位置づけがされていないことにある。

現在、重種馬需要の大半は食肉需要である。本来ならば、重種馬は「肉用馬」と名づけられ、食肉用に生産、飼養されなければならない。しかし、馬に携わる人間にとってその事はかなりの抵抗がある。

古くより、馬は特殊な家畜として飼養されてきたからである。開墾のための労働力、地力維持のためのたい肥生産といった農業経営の充実という側面、「強い馬を生産」という農民の生き甲斐といった農村生活の充実という側面、ばんえい競馬のような馬事文化的な側面など様々な側面に支えられ、今日まで飼養されてきた。

とはいえ、経済条件などを無視し、趣味的要素だけで飼養を維持していくことは困難である。現に、重種馬の生産頭数は年々落ち込み、飼養農家戸数も減少している。現状の生産、利用形態ではもはや、限界ということである。

しかし、趣味的要素を含みながら副次的に生産される事が本来の「馬産」の姿である。その生産・利用拡大だけが全てではないのである。

生産・利用拡大を謳われ「趣味」や「名誉」という事を失い、「経済動物」、「生活の糧」となった、軽種馬産業はどうであろう。圧倒的多数の農家が専業で軽種馬を生産し、現在、経営難となり、多くの牧場が倒産に追い込まれている。

重種馬の現在の形は「馬産」ということを考えれば、ある意味、理想形なのである。ばんえい競馬の競走馬を目指し、趣味的、副業的に生産される。競走馬になる確率は低いが、なれなかったとしても「馬肉」という、それなりの需要があり、大損はしない。不安定ではあるが、競走馬として成功すれば、経済的恩恵を受ける事ができる。「馬産」とは本来そういうものではないだろうか。

この一連の流れが変わらない限り重種馬生産は無くならない。仮に無くなるとすれば、趣味的要素、つまり、ばんえい競馬が廃止になった時である。おそらく、今後も局地的なことは変わらないが馬肉需要は無くならない。輸入チルド肉、生体馬輸入は増加しているが、今後も国産馬肉は高級嗜好品として一定量消費されていくだろう。

とはいえ、生産者の多くが肉用に重種馬を生産するかといえば疑問である。「競走馬より肉用馬の方が安い」という価格の問題ではない。前述したように、馬は特殊な家畜なのである。生産意欲をかきたてる「競走馬」というものがあるからこそ、重種馬産業は成立するのである。

つまり、重種馬産業の鍵を握っているのは、「ばんえい競馬」である。ばんえい競馬の活性化こそが重種馬産業の発展を担っており、決して廃止にはしないのである。

確かに、ばんえい競馬を取り巻く環境は厳しい。1つの可能性として、札幌での開催もあるが、現行の法の下では北海道に新しく競馬場を建設することは、実際のところ難しい。累積赤字も増えつづけており、地方財政を圧迫している部分もある。また、「競馬といえば博打」という世間的にグレーなイメージも依然として残っている。しかし、1つのレジャー産業としてみた場合、年間約150日開催し、一日平均で観客を約4,000人動員、一億円強を売り上げる事のできるレジャー産業が北海道には見当たらない。

ばんえい競馬は北海道民が試行錯誤を繰り返し創造した、世界に誇れる独特な馬事文化でもある。この馬事文化の保存を唯一可能にするのが「重種馬」なのである。重種馬生産振興の重要な柱として、今後は、ばんえい競馬のさらなる振興を図るべきである。

目次

序章	1
(1) 課題と方法	1
(2) 本論の構成	1
第1章 重種馬の変遷	3
第1節 重種馬の登場	3
第2節 第2次大戦までの重種	5
(1) 第1次馬政計画期（明治後期から昭和初期まで）	5
(2) 第2次馬政計画期（日中戦争から第2次大戦終了まで）	9
第3節 戦後の重種馬	11
第2章 重種馬の生産形態	15
第1節 重種馬の品種と生産、飼養の動向	15
(1) 重種馬の品種	15
(2) 生産、飼養頭数の動向	16
第2節 十勝地方の重種馬生産の実態	19
(1) 十勝地方の重種馬生産・飼養状況	18
(2) 十勝地方の重種馬飼養農家の実態	22
第3章 重種馬の需要構造	25
第1節 重種馬流通と市場	25
(1) 重種馬流通の概要	25
(2) 流通機構	27
第2節 競走馬登録と流通	30
第3節 肉用馬流通	33
(1) 馬肉食の変遷	33
(2) 肉用馬流通	35
第4節 その他の需要	39

第4章 重種馬の利用形態	41
第1節 ばんえい競馬	41
(1) ばんえい競馬の沿革	41
(2) ばんえい競馬の展開過程と現状	43
(3) ばんえい競馬の将来	48
第2節 馬肉	49
(1) 馬肉消費の現状	49
(2) 馬肉の将来	51
終章	53
参考文献	57